二地域居住実践者インタビュー

本資料は、令和6年度発行した「二地域居住ってどんな暮らし？」に
掲載されている二地域居住実践者のインタビュー全文になります。

二地域居住実践者インタビュー

【季節滞在】峯岸 知恵美さんファミリー

東京都荒川区 ⇄ 岡山県高梁市　｜　フリーランス/40代/ご夫婦＋子供1人

二地域居住を始めたきっかけ

東京都在住の峯岸さんは、自然豊かな山梨県で育ちました。娘にもこうした経験をさせてあげたいと考え、現在通っている保育園に在籍しながら、地域の保育園に通える「保育園留学」という取り組みを知り、2024年5月に5歳の娘さんと共に岡山県高梁市で3週間の滞在を決めました。その後、2025年1月にも1週間滞在し、今後も高梁市への訪問を続ける予定です。

働き方

東京では、子育て中ママ向けの相談室の運営や、ママ同士が子供を連れて気軽に集まれるような親子ひろばなどを企画・運営するなど、フリーランスで子育て中のママをサポートする仕事をしている峯岸さん。

「地域で暮らすように滞在したい」と思っていた峯岸さんは、高梁市が提供するインターネット環境の整った「お試し住宅」を生活の拠点にして、親子で3週間の二地域居住を体験しました。ご主人はリモートワークができないため、最初の2、3日のみ最初同行し、その後は娘さんと二人で過ごしました。

保育園留学の受入に当たっては、地域側が地元の保育園を利用できるように調整してくれるので、娘さんを保育園に預けた後、峯岸さんは普段の仕事をリモートで行ったり、同時に地域の人々との交流を積極的に進めました。

二地域居住の楽しみ方

人見知りだという娘さんが地域に馴染めるか不安を持っていた峯岸さんは、行く前に高梁市やお世話になる保育園の写真などを見せ、娘さんが緊張しないように色々工夫したそうです。それでで、現地に行ってみると緊張してしまった娘さん。

地域のNPOの方が善意で開いてくれた交流会で、初めは峯岸さんの後ろに隠れていたそうですが、地域の皆さんの温かさに触れて、殻を破ったように心を開いて、気づけば地域に溶け込んでいきました。

休日は地域のイベントに参加をしたり、田植えを手伝ったり、地域の人との交流を深めた峯岸さん。地域のNPOは普段から移住希望者の受入なども行っているのですが、短期間の利用が多く、峯岸さん親子が中長期滞在したことで、コミュニケーションをじっくり図ることができ、保育園の受入事務局宛に「こんなに素敵なご家族を紹介してくれてありがとう」と連絡があったそうです。

「娘にとってはすべてが新鮮な体験でした。最終日は娘も私も別れ難く涙が止まらないくらいでした。東京に帰ってからも手紙やSNSで関係を続けています。地域の方も『一緒に田植えしたお米だよ』とお米を送ってくださいました。今回の経験を通じて、娘が『大きくなって家族ができたらここに住みたい』と言ったことは、私にとって大きな喜びです。」

ご主人とは毎日ビデオ通話でその日の様子を話せたので、離れていても滞在中の楽しそうな様子や、地域の皆さんにどのように受け入れてもらっているかが伝わり、1月にもまた滞在したいとなった時に、快く送り出してくれたそうです。

二地域居住のポイント

ペーパードライバーなこともあり今回車を利用しない選択をした峯岸さん。徒歩とバスで45分ほどかけてスーパーや薬局に行った際、受け入れてくれた保育園に通うお母さんと偶然出会い、帰りは峯岸さんを乗せてくださったとのこと。病院など徒歩圏内にはないため、何かあった際の車の必要性は感じたそうです。

「地域に行く前には私からお願いして事前のオンライン面談をしていただき、生活の具体的なイメージを持つことができました。二地域居住を検討し始めた当初は、いくつかの地域に一時保育を問い合わせたものの、調整の難しさを実感しました。今回のように、住まいだけでなく、地域との交流や保育園の利用などを調整してくださっていると、実践のハードルが下がるのではないかと思います。」

二地域居住実践者インタビュー

【平日テレワーク】滝口峻平さん

山梨県甲府市⇄埼玉県横瀬町時々東京　｜　フリーランス／30代

二地域居住を始めたきっかけ

滝口さんは参加していたIT系のコミュニティの人から多拠点居住サービスの情報を教えてもらい、場所に囚われない働き方に興味を持った滝口さん。出社が必須の会社員だったため、まずは土日を使って多拠点居住サービスを利用し、利用者の皆さんから実践方法などの話を聞き、働き方を変えることを決意。会社に相談し、会社員から業務委託に切り替えました。

働き方

横瀬町の宿泊ができるコワーキングスペース「Lab横瀬」の月額会員になって、平日はリモートワークでエンジニアの仕事をしながら、月に1回程度、居住地の甲府市やITコミュニティに参加するために都内を行き来する生活を送っています。

現在は、業務委託先の企業と、週に2,3回オンラインでミーティングをしながら、エンジニアとして働いている滝口さん。リモートワークに変わったことで、会社の状況が読めないところもあるそうですが、業務を行う上で大きな支障はないと滝口さんは語ります。

「リモートワークがベースとなって、コミュニケーションが取りにくくなったところはありますが、月に1回は地元に戻って業務委託先の企業に足を運び、顔を合わせた打ち合わせを丁寧に行うことでカバーしています。

また、働き方を変え、離れたからこそ、勤めていた時よりも会社の理念に向き合うことができ、信頼関係が生まれ、続けていけると感じています。」

二地域居住の楽しみ方

居所としているLab横瀬には、地域のコミュニティスペース「エリア898」が併設され、多拠点居住者だけでなく、地域住民や地域おこし協力隊、地域の子どもたちなど、様々な人が集う場所になっています。

「初めて1泊2日で訪れた時は、静かに仕事ができそうだなと感じたのですが、2回目にきた時にはちょうど施設の２周年イベントがあり、役場の職員の方や町民の皆さんなどが集い、フラットに交流できる場に参加しました。利用者も、町の皆さんの距離が近く、まち歩きイベントなどにも誘ってもらいました。ここにはたくさんの人が集う場所なので、そこでまたイベントや体験などの機会に誘われるようになって、これまでに武甲山の登山やランニングイベント、味噌作りなどに参加しました。」

地域のイベントでは、趣味の将棋を活かして子供達に教えるブースを設けて交流したり、ITの仕事をしていることもあり、地域の皆さんのインターネットに関する相談に乗っていたり、地域の人に受け入れられている滝口さん。

二つの地域を行き来することで、横瀬町での暮らしはもちろん、地元での暮らしにも彩りが生まれたそうです。

「二つの地域を行き来することで、今まで当たり前で気づかなかった、普段の生活の場の良さにも気づけるようになりました。地元に戻ると、横瀬町のみんなにもそれを紹介したくなります。」

また、地元に戻った時は、友人と勉強会を開いたり、遊びに行ったり、横瀬町とは違った繋がりの中で充実した時間を送っているとのこと。

二地域居住の困りごと

滝口さんに困りごとを尋ねたところ、「二地域居住を始めた昨年は、人生で一番忙しい時期だったけれど、一番良い一年でした」との答えが返ってきました。これまでは、忙しいときは職場と、家と、休日は勉強会をやるためのファミレスにしかいなかったそうです。

「横瀬町なら、忙しくても、ちょっと誰かと話せたり、少し町内を移動するだけでも変化が感じられます。一番忙しかったはずなのに、ストレスフリーでした。」

強いていうのであれば、エンジニアの仕事として、検証用の端末を多く持ち運ぶ必要があるため、移動する時の物が減らせないという悩みがあるそうです。

二地域居住のポイント

「忙しいときはなかなか旅行などの気分転換にも行けませんが、二地域で暮らすことで、そこの場所に行って暮らすだけでも変化を感じることができます。普段と違う場所で過ごすということは、仕事のパフォーマンスも上がって、モチベーションも上がるので良いと思います。」

二地域居住実践者インタビュー

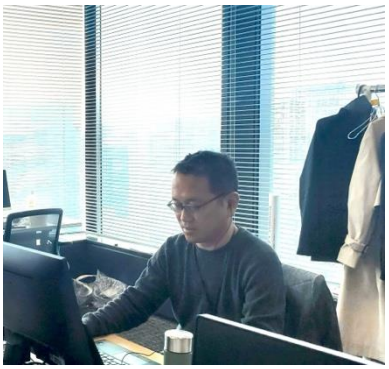
【地域でワーク】平山寧さん

東京都江東区 ⇄ 栃木県那須町　｜　会社員／50代

二地域居住を始めたきっかけ

平山さんは2021年に那須町にセカンドハウスを購入しました。コロナ禍で出社規制となり自宅でテレワークをしていましたが、味気ないと感じて、地域での暮らしをしてみたいと思い、いくつか地域を探しました。那須町は父親の出身地で、平山さん自身、子供のころに帰省していた経験もありました。不動産会社を通じて別荘の物件を見つけて、月に2〜3回那須町に通っています。

働き方



平山さんは、東京海上日動での会社員の傍ら、那須町の副業型地域活性化起業人として活躍中です。基本的に東京のオフィスへの出勤は6-7割とのことで、週1日は那須町でリモートワークをしているとのこと。

「先日は、金曜日の早朝に家を出て、9時の始業時間に間に合うように那須町に向かいました。那須町では、主に「ワークベース」という那須町のコワーキングスペースか、自宅でリモートワークをしています。」

本業でスマートシティ開発のプロジェクトチームに関与していた平山さん。二地域居住を始めた当時は町とのつながりはなかったものの、何か貢献できることはないかと思い、町那須町の移住推進の活動をボランティアで手伝い始めました。

2024年に那須町から全国初の副業型地域活性化起業人として正式に委嘱されました。現在は二地域居住や移住のPR、その関連事業を担当しています。

町の仕事は、主に二地域居住に関心がある人向けのツアーの企画や受入等のため、平日の勤務時間外や土日の時間を使って、町の関係者との打ち合わせや、ツアー参加者への説明などを行っています。

「東京海上日動は、会社の規定として月30時間までは上長承認で副業ができるようになっています。副業型地域活性化起業人も、月20時間以上が活動時間の目安となっていたため、会社との調整はスムーズでした。」

二地域居住のポイント

平山さんは那須で運営しているサウナ付きVILLAに友人やお客様を招待して夏はBBQ、冬は温泉、スキーなどを一緒に楽しみながら那須の魅力、二地域居住の魅力を伝えていますなお、二地域居住をする上で、平山さんは２つのことに気をつけているそうです。

「１つは「時間管理」。地域の仕事は大変魅力的です。のめり込んで生産性が落ちないように、時間内でパフォーマンスを出せるように意識してコントロールをしています。

もう１つは「情報管理」。会社員として守るべき機密情報、守秘義務などがあります。また、那須町での地域活性化起業人企業人としての守秘義務があります。打ち合わせ等を行う場合は守秘義務を担保できる場所なのかを踏まえて、場所を選んでいます。」

二地域居住のポイント

「二地域居住には２つのメリットがあります。１つは、「本業と副業のシナジー」です。那須町で感じた社会課題、地元の経営者との対話が本業ビジネスのアイデアの種となることもあります。また、「ウェルビーイングの向上」にも寄与すると思っています。自然豊かな場所で過ごすことで、リフレッシュした精神状態を得ることができます。那須は東京から車で2時間半と近く移動に負担もかかりません。国も支援する動きがあるので、広がっていくことに期待していますし、那須町の二地域居住アンバサダーとしてこれからも発信していきたいと思います。」

二地域居住実践者インタビュー

【週末居住】藤田麻衣子さんファミリー

東京都台東区 ⇄ 千葉県南房総市　｜　会社員/40代/ご夫婦＋子供２人

二地域居住を始めたきっかけ

　キャンプなどのアウトドアが趣味の藤田さん一家が二地域居住を始めたきっかけは、自然の中での生活拠点を持ちたいという思いからでした。キャンプは設営と撤収で時間がかかってしまい、焚き火や料理をするだけであっという間に時間が過ぎてしまいます。自然の中での暮らしを楽しむ時間を持ちたいと、場所を探していたときに友人から南房総市の「シハラマ校舎」の場所を教えてもらいました。

　シラハマ校舎は、廃校を18の小屋とレストラン、シェアオフィス、コワーキングスペース、宿泊施設として改修したできた複合施設です。その小屋エリアに、コロナの少し前に小さな小屋を建てたそうです。

働き方

　コロナ禍にテレワークができるようになり、平日は東京で出社と自宅でのテレワークを組み合わせて働く藤田さん。テレワークできる環境を生かし、小学生のお子さんを持つ藤田さんは、働きながら、お子さんの習い事などの送迎なども行っています。

　藤田さん一家の二地域居住は、子供達の学校などもあるため、週末二地域居住がメイン。平日は月曜日から金曜日まで仕事をして、子どもたちの習い事などを終えて、ご飯・お風呂などを済ませてから、金曜の夜に家族みんなで車で南房総市へと向かいます。シラハマ校舎を拠点に釣りやシュノーケリングや磯遊び、海水浴をしたり、裏山で遊んだり、場所を通じて出会った他のファミリーや、場に関わる人との交流を深めながら週末の時間を過ごします。そして、日曜日の夜に食事・お風呂などを済ませて、渋滞しない時間を選び、夜に車で東京へ戻る生活をしています。

「キャンプだと荷物を詰め込んだり、着いてから設営等をしなくては行けませんが、小屋があれば必要なものを置いておくことができます。到着して布団を敷けばすぐに眠れるし、すぐ遊べます。東京から千葉の旅行の場合、渋滞に巻き込まれることが多いと思いますが、こうした生活の拠点があれば、チェックインやチェックアウトの時間を気にしなくて良いので、ゆっくり時間を過ごすことができます。」

二地域居住のポイント

「子どもが小さいうちは保育園を休んで連れて行けばよかったけれど、小学生になり学年が上がってくると、授業や習い事などとの調整が必要となっていきます。中学生になれば、部活や子ども自身のコミュニティもあるので、今までのような二地域居住は難しくなる可能性もあります。

　また、コミュニティが合わないということもあるかもしれません。自分たちのライフスタイルもそうですが、コミュニティも変化するものなので、変化を受け入れていくことが大切かと思います。拠点があるということは、物を置いておける利点もあるのですが、シラハマ校舎から自宅に戻ってきた際に、夫が仕事で使うPCを置いてきてしまったことが発覚し、夫だけまたシラハマ校舎に戻ったことなどもありましたので、持ち物のチェックなどは重要かなと思います。」

二地域居住のポイント

「コロナ禍で東京での予定もなく、繁華街・人の多い公園へも行けない中、自然豊かな南房総に救われました。生活拠点があれば荷物の持ち運びの手間も少なくなり、渋滞する時間を避けて移動できることもメリットの一つ。旅行よりも時間とお金の制約を感じにくいと感じます。また、予約が不要なので、天気や家族の予定次第で、行くかどうかを直前に決めることができます。

キャンプは一期一会ですが、同じ場所に通うことによって、自然や人、体験の連続性から得られる変化を楽しむことができます。二地域居住は、単なる旅ではなく、生活の一部としての深い楽しさと継続性を提供してくれます。」